

# 月刊ウィーン

現地オリジナル取材と編集で  
ウィーンを伝える月刊情報紙  
おかげさまで今年は 創刊 24 年目  
創刊 1989 年 No.271

# GEKKAN-WIEN 2012年1月号



Gustav Klimt Marie Henneberg, 1901/02 Öl auf Leinwand 144,5 x 144,5 x 7 cm Stiftung Moritzburg, Halle an der Saale Foto © Klaus Goltz, Hall  
Unteres Belvedere GUSTAV KLIMT / JOSEF HOFFMANN PIONIERE DER MODERNE

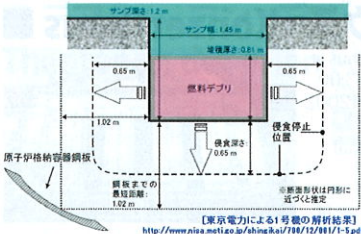




# 杉本純の原子力の話II ウィーンと京都 4



京都を訪れる観光客は、紅葉目当ての十一月が年間のピークで十二月に入ると激減する。その十二月二日、東京電力は、福島事故に関する事故調査中間報告書を公表した。報告書では、これまでに明らかとなった事実や解析結果等に基づき原因を究明し、既存の原子力発電所の安全性向上に寄与するための方策を提案している。事故原因を踏まえた今後の対応方針として、徹底した津波対策、柔軟な対策による機能確保、炉心損傷後の影響緩和策を挙げている。具体的には、津波対策として、防潮堤、防潮壁、及び重要機器エリアの水密化、また、柔軟な対策として、電源及び海水系の喪失を前提とした炉心損傷防止のための機能の確保、さらに、炉心損傷後の影響緩和策として、水素滞留防止策、ベント信頼性向上策、及び格納容器冷却対策を挙げている。



落下炉心割合	100%
燃料デブリ堆積厚さ	0.81m
侵食深さ	0.65m

二日前の十一月三十日には原子力安全・保安院の主催により、一、三号機の炉心損傷状況の推定に関する公開技術ワークショップが

開催された。中間報告書に記載された炉心損傷状況の推定について、東京電力、原子力機構、原子力安全基盤機構、エネルギー総合工学研究所から報告があった。東京電力からは、一号機の溶融した炉心は、ほとんどが原子炉圧力容器を貫通して格納容器床に落下し、ベースマットのコンクリートと反応し、鋼製の格納容器壁まで三七センチのところまで浸食したとの解析結果が報告された。本会合には筆者も出席していくつか質問し、損傷状況の推定ではスリーマイル島事故の経験を参考にあらゆる手段を駆使すべきとコメントした。いくつか不明の点も残されているが、かなりの部分が明らかになって来たとの印象を持った。今後のさらなる解明が期待される。

さて、十月号でウィーンと京都の共通点の一つに、両市の代表大学であるウィーン大学及び京都大学が国内随一のノーベル賞受賞者が輩出していることを述べた。ウィーン大学関連のノーベル賞受賞者は、ローベルト・バーラー(一九四四年、生理学・医学)、ユリウスワァーグナー・ヤウレック(二七年、生理学・医学)、ハンス・フィッシャー(三〇年、化学)、カールランツシュタイン(三〇年、生理学・医学)、エルヴィン・シュレーディンガー(三三年、物理学)、ピエター・フランツ・ヘス(三五年、物理学)、オットー・レイヴィ(三七年、生理学・医学)、コンラートローレンツ(七三年、生理学・医学)、フリードリヒ・ハイエク(七四年、経済学)、エ



ルフリーデ・イエリネク(二〇〇四年、文学)の十名。京都大学関連では、湯川秀樹(四九年、物理学)、朝永振一郎(六五年、物理学)、江崎玲於奈(七三年、物理学)、福井謙一(八八年、化学)、利根川進(八七年、生理学・医学)、野依良治(〇一年、化学)、益川敏英(〇八年、物理学)の七名である。筆者が大学一回生時に最終講義を聴いた湯川先生は初代の原子力委員を務められた益川先生は、原子力機構が高エネルギー加速器研究機構と共同運営する大強度陽子加速器J-PARCと深い関係がおりになるなど原子力との接点がある。余談であるが、先日約四十年振りに世界遺産に登録されている洛北の龍安寺を訪問した。かつてもまた今回も龍安寺の石庭の意味する所は良く理解できなかったが、観光客が多い割にはその静寂さと美しさが印象的だった。石庭に面する縁側に座ってスケッチしたのでもその雰囲気がいささかも伝わればと思ひ、素人絵で恐縮であるが掲載させて頂く。

■杉本純  
京都大学教授/元原子力機構ウィーン事務所長